



野口明

— 大正的教育人としての教育者 —

白梅学園大学学長 無藤 隆

野口明は白梅学園短期大学の学長を昭和37年4月より40年4月の4年間勤め、また白梅学園高校の初代の校長としても昭和39年4月より1年間奉職された人である。その生涯は、一生の仕事教育に定め、その仕事に尽くしたものであり、同時に、悠々たる人生を、仕事と家庭や交友の生活とそして趣味である絵に費やして過ごしたのである。白梅学園大学の学長室にはその描かれた絵画の一つが掛かっており、その絵を眺めつつ、穏やかな風景の描写に在りし日の氏の人柄をしのぶことができる。本稿では、幸いに残

された自伝的な文章から、その経歴を追いつつ、人となりの一端を紹介したい。何より、その没後に編纂された著作を読む内に、親しみを覚え、長年の知己のごとくに、その様子を伝えたいと思ったのである。

白梅学園短期大学の二十五年史には、氏の就任の事情等には以下のように簡単に触れている。

野口明を学長に迎えることとなった。「同氏はすでに悠々自適の生活にあり、画筆をとることを楽しんでいたが、理事会の懇請によって、小規模な大学が好きだからとの理由

で就任を承諾されたのであった。「ちょうどおりしも、校地移転の話が出ており、小平市に土地を獲得し、移転した時期でもあった。曾志崎理事長、樋口愛子常務理事と密に協力して進め、その大事業を成し遂げている。「野口学長は大らかな包容力とともに強い責任感をもつ人格者であった。」と評されている。

本校では、その野口氏の人柄に焦点を当てつつ、手に取ることの出来た資料から足跡を探りたい。とはいえ、手持ちの資料を見る限りにおいて、残念ながら、白梅学園に直接に触れた文章を見出すことが出来なかった。それは資料の新たな発見に待つとして、ここでは、その履歴とともに、人柄をしのぶよすがとなるところを述べたいと思う。以下、主な資料は、野口明「思い出の記」（非売品、野口喜代子刊行、昭和60年9月）による。

生まれ育ち

氏は、明治28年5月東京の麹町に生まれている。ちょうど日清戦争の折である。父は陸軍に奉職する獣医であった。幼い頃は東京のいくつかの地域に転居した。幼年時代の多くは麹町の、現在の番町小学校の近くに居住していた。氏はいったいに記憶がよく、小さい時期の思い出もその随想にあれこれと記している。幼少時のこの家は、玄関前に柿

の木があり、庭には梅の木、石榴、竹、椿が植えられ、また小さい畑を作っていたという。靖国神社のお祭りに親に連れて行ってもらったり、祖母や母に寄席に連れて行かれたりした。いかにも明治の後半の東京市内の様子が伺われる。

小学校は番町学校に行っていたようであるが、父が清国政府の招きにより、馬医学堂の教頭に赴任するにあたり、寄宿舎のある学校に入り、東京に残ることとした。暁星学校を選ぶことになった。そのことを氏は「暁星学校に入ったことは実に一生の幸福であった」と述べている。この当時、暁星はまったくフランス風であり、極めて厳しい生活であった。学業の成績はよかったようである。野球（ベースボール）と書いているなどにも親しんだ。2年ほどで母親の帰国に伴い、自宅に戻った。中学になるとともに、勉学に努め、また水彩画を習うなどした。漢学の講義を夜学の形で学んでもいる。明治42年に下六番町に家を買取り、そこに住まうことになり、その後、そこで生涯暮らし続けることになる。

大正2年、父が帰国し、仙台の第二師団獣医部長として勤務することになった。ちょうど暁星の中学を卒業し、一家揃って仙台に移転するのに合わせて、氏はその年の9月、第二高等学校文科乙類に入学する。

その後、仙台は氏にとって東京に次ぐ第二の故郷となる。大部分は東京に暮らし、地方は長崎に一年、横浜に一年、仙台に前後九年を過ごした。故に仙台は東京に次いで長く過ごしたのみならず、感激の深い生活であり、心のふるさとであると述べている。

その学生生活は、単調なもので、「毎日放課後は日の暮れるまで野球の練習をして夜は勉強するだけであった。寒いシーズンには、厳寒の時には登校前に五色沼にスケートに行った。」スケートの他に、スキーやハイキングに親しんだ。多くの尊敬すべき先生や友人たちに囲まれ、心豊かな生活を送ったようである。「私には新しい世界に目が段々と開かれる思がした。晩翠先生作の二高校歌の一句に「我れ人生の朝ぼらけ」とある如く、私にとっては精神的ルネッサンスと思われるのが、仙台の青春時代である。」と述べている。

官僚の世界へ

二高の卒業後、氏は東京帝国大学法科大学政治学科に入學する。卒業後は、文部省に入り、文部属として勤務する。すぐに、高等試験行政科に合格し、文部省に勤務する。長崎県警務課長や神奈川県警務課長に外向することなどを経て、大正13年に文部省普通学務局第三課長等として勤務す

る。大正14年に区内大臣秘書官になり、その後、侍従となり、昭和7年には新設の呉竹寮付きとなり、内親王の養育にあたることになる。その篤実な勤務ぶりは例えば、関東大震災の折に、横浜から東京へと歩いたり、トラックに乗ったりと苦勞して、報告と援助を求めに行く文章でも知られる。

教育の世界へ

官僚の世界から、当時在任していた、帝室林野局管理部長から仙台の二高の校長へと転身することになる。昭和18年春、当時の校長の阿刀田氏が老齡のため退く決意をする。「非常時に当たっては、却って素人に如かず」として、二高の卒業生で社会で活躍している人から候補を探すが、適任が見つからない。そして、野口氏に声が掛かり、再三の辞退にもかかわらず、引き受けざるを得ないことになる。文部省の次官からも勧めがある。「二高生を引連れて、沿岸防備位に当るようなことも起こるかもしれない」とまで考えて、引き受けることとする。その後、戦中戦後の6年間を勤務することになる。すなわち、二高の最後の校長となるのである。

戦後、教育使節団によって義務教育の六三制が提議され、全国の高校側は存続への声明を出す等の働きかけを行

う。高校側として、戸田貞三、天野貞祐、関口泰、務台理作、佐野利器、小宮豊隆、などととともに、日本側の教育刷新委員会に対して存続を力説もする。ついに、旧制高校がなくなるにあたり、二高についてもその移行のあり方を決めることとなった。占領軍の代表と協議をし、旧制高校の良さを伝えて、相手側も理解をしてくれたとある。結局、東北大学との合併の案が提示された。全国高等学校会議において、一高・三高とともに、ジュニアカレッジとなる案を建議したが、反対も出て、東大の南原総長も反対であった。その後、東大は一高を合併することに踏み切り、二高もまた東北大学への合併へと追い込まれたのである。これを振り返り、氏は、「年限の割振りは旧制がベターであり、改正を要しない、改むべきは教育内容である」とまとめている。

その後、氏は、昭和24年に東京女子高等師範学校がお茶の水女子大学に変わるに当たり、その初代の学長となり、28年12月まで勤める。「お茶の水女子大学百年史」（昭和59年5月刊行、「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会）によると、東京女子高等師範学校は、昭和23年当時、女子大学を国立・私学が協力して教育使節団の後押しの下で設立に至るところで、女子の総合大学として文学部・理学部・家政学部・教育学部の4学部からなるものを創設しようとし

ていた。その案は文学部と理家政学部からなる「専門の複合大学」としても文部省の大学設置委員会で認められた。その折に「お茶の水女子大学」という名称も選択された。東京女子高等師範学校の最後の校長は藤本万治であったが、お茶の水女子大学においての学長として移行することは文部省が認めず、旧制二高の校長であった野口氏が急遽、任命されたのである。昭和24年5月31日付である。なお、入学式は7月1日に行われて、学生が集って発足に至った。なお、昭和25年3月末日に文教育学部・理学部・家政学部の体制になり、現在までのものが形作られることになる。東京女子高等師範学校の最後の卒業生は昭和27年3月に出ているので、それまで、氏はその校長も兼務している。

この当時の記録を見ると、大学としての多くの組織や規定を設置・制定するとともに、日本社会の大きな変動に対応しつつ、お茶の水の大学としての地位の確立のための文部省等への働き掛けなど、実に多岐にわたる活動が展開されており、その中心である学長の多忙さは想像に難くない。例えば、その中の一つが学長を文部省による任命ではなく、内部での選挙によるものとするなどがあった。そのことに限らず、多くの今に至る大学としての基本的な制度がこの頃に作られている。

氏はお茶の水女子大学を辞した後、しばらくは多忙な公

務から離れていたが、縁があり、白梅学園短期大学に昭和37年より40年まで勤務することになる。また各種の役職に就いている。

昭和54年9月2日に84歳で世を去ることとなる。

趣味三味の教養人として生きる

氏は絵を趣味として描き続けたいから文部省に勤めることにしたと書いているくらい、絵は本職同様であり、また旅行も趣味としつつ、長短様々な随想に書き記し、またさらに禪についても深入りをしたようである。

その絵は画集を残しているくらいでもあり、素人の域を超えている。中学高校でも絵を習っている。大学時代には一月にわたり満州に写生旅行に出ており、いろいろな機会に絵を描いている。風景を丁寧に描いたものが多い。絵は氏にとって人生のむしろ中心であったのかもしれない。自分には「画は結局遊びである」として、男子の生涯を託すべき職業ではないと思込んでいた。」という。とはいえ、「私は生来画を愛好するので、画に打込むつもりである」とも述懐している。中学校時代には日曜日に絵の研究所に通ったり、社会人になってからも夜の研究所に通ったこともある。絵においては、「対象を見て画心を喜ばせ、振るい立たせ、描かせるその感激が根本である。」とその見方を述べ

ている。

写生のためであったり、それ以外でも、氏はたびたび長期の旅行を試みている。旅行記を記すことも好んでいたようで、いくつもの旅の記録を残している。長いものでは、「カムチャッカ訪問記」が著作として出されている。その折りの旅は一ヶ月あまりのものであったが、おそらく日記を元にした詳細なものである。事実の経緯や現地事情の記録があり、またそこで出会った人々との出会いの様子が記される。

カムチャッカに入ったときの描写がある。「左舷約二哩程の処に残雪猶多き紫の連峰と海に向つて屏風を立てめぐらした様な黄褐色の険涯が蜿々と連なつて居る。茲に於てか思はず快哉を叫ばざるを得なかつた。早速室から油絵の道具を持ち出してスケッチを始める。拭つた様な清澄なブルーの空、琅かんの様な海の色、そこには北の国らしい陰鬱さもなく暖国の春かと思う様な暖かな柔らかな色彩の世界があるのであった。風景としては単調であるかも知れない然し何と云う幽厳さであるう、何と云う清澄さであるう、「絵の好きな氏らしい描写であり、そこでの感動が伝わってくる。

その他にも、長崎、大和、九州、十和田、香港、水郷、木曾路、箱根、という具合に、様々な紀行文を叙している。

折々に扶まれるスケッチも魅力である。文人たらんとする氏の性向がそこでは伸び伸びと発揮されている。

こういった趣味の世界に楽しみを広げる一方で、氏は禅の世界にも親しむ。生家は日蓮宗であり、小中学校はカトリックのミッションスクールである。高校において宗教に関わる講演を度々聴き、仏教に親しみを覚えた。法話を聞き、鈴木大拙の著作にも親しんだ。昭和14年、44歳の折りに勧めがあり、禅教会の道場に通うことにしたのである。入門の許可を言い渡され、法の絶対尊重、一切自力本位、生涯実行、の三事を誓約した。極観の号を与えられる。道場へ通うことは昭和16年の戦争の本格化で中断されざるを得なかったが、氏は、禅により自分の人生観を築くことが出来たと述懐している。「禅は非常に新鮮味を伴うことに驚きと喜びを覚えた。」「自分で考えること、考えが尽きた時にもそれに失望しないで最後の結論を探求することを訓練した呉れたように思う。」と振り返っている。

教養人として生きよう

氏は、官僚としてまた教育者として生涯を生きてきた。そして、絵や旅や禅に余暇を費やし、充実した生活を過ごしている。文章を記すことも好きだったようである。

それらが別のことではなく、氏の人格として一体のもの

であるところに、今、その文章を読んでもなお魅力を感じる由縁があるように思う。おそらくその根には明治期の東京の暮らしの健全さがあるのであろう。中流の勤め人の家に育ちつつ、近隣の庶民の楽しみを生きてきた。その上で、西洋流の教育を受けつつ、英語を学び、同時に、漢学の塾にも通う。油絵や水彩画を習いもする。長じて、参禅の経験を持つ。そのどれもが、氏の生き方に深く影響を与え、人格としての統合性を果たしていく。

明治期の教養を引き継ぎつつ、大正期に旧制高校を中心に成立した教養教育の最もよき伝統をその身につけたとあってよいのではないだろうか。そして、その教養を裏切ることなく、誠実に一生を過ごし、その生き方による感化を、二高において、また新制のお茶の水女子大学において、白梅学園短期大学にも、その人柄に親炙する同僚や学生に広げていたであろうことは想像に難くないのである。

そのような教養人を私ども白梅学園の先達の一人に持つことを改めて誇りに思いたいと感じる次第である。

注記 資料を貸与して頂いた白梅幼稚園の喜多村純子さん、白梅幼稚園前副園長に感謝申し上げます。喜多村さんは野口明氏の縁戚に当たられるということです。